様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ４ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５３０８１６

研究課題名（和文）関係性の類型と拡張自己評価維持過程

研究課題名（英文）Typology of Relationships and Extended Self-Evaluation Maintenance Processes

研究代表者
村本　由紀子（MURAMOTO, YUKIKO）

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号：００３０３７９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、関係性の違いが自己評価維持の方略にいかなる違いをもたらすかを理解する目的で行われた。(1) 33項目の関係性尺度に対する日米大学生の回答から通文化的な7つの構成要素を抽出し、これらの組み合わせによる3つの典型的な関係性タイプを同定した。(2) 他者との関係性に応じた達成原因帰属の様相を質問紙調査によって検討した。(3) 関係性のミニマル・モデルを実験室に構築して、自他の自己評価維持のしくみを検討した。(4) モデルの妥当性を現実場面の文脈で検討するため、企業・団体の正社員を対象としたインターネット調査を実施した。

研究成果の概要（英文）：The present research aimed to figure out how different human relationships exert different effects on individuals' minds and behaviors, especially their ways of self-evaluation maintenance. First, we developed a 33-item scale of psychological relationship and investigated the multidimensional structure among Japan and US college students. We identified three prototypes of relationship by a combination of seven components extracted from the data. Second, we conducted a paper-and-pencil experiment to reveal various roles of relationship to maintain and enhance self-esteem. Third, we constructed a minimal model of relationship prototypes in a laboratory and examined how people achieve self/other evaluation maintenance in different situations. Forth, we conducted an internet survey of permanent employees in which we aimed to examine the validity of our model.

研究分野：社会心理学

キーワード：心理的関係性　拡張自己評価維持過程

１．研究開始当初の背景

「心の文化差」に関する研究領域には膨大な実証研究の蓄積があるが、これに携わる研究者の多くは、長らく「西洋 vs.それ以外」の二分法にこだわり、多様な文化の相互の結びつきには必ずしも十分に注意を払ってこなかった。しかしグローバル化する現代社会においては、さまざまな領域で複数の多様な文化が出会い、「文化のハイブリッド化」（Pieterse, 1995）が生じている。個人レベルでみても、ひとりの人間が発達の過程で身を置くのは、決してアメリカ文化、もしくは日本文化とラベルづけし得るような「一枚岩」の文化ではない。生まれ育つ家庭、何年にもわたって通う学校、地域のコミュニティや職場等々、個人は多彩な集合体がもつ固有の文化に幾重にも取り巻かれて成長する。その意味で、文化は個人内でも多層構造を有しているといえる（村本, 2003）。

こうした問題意識を踏まえ、我々は、文化差を読み解くためのパースペクティブとして「関係性（relationship）」の違いに眼を向け、一連の研究を行ってきた（e.g., Muramoto, 2003; Muramoto, Yamaguchi, & Kim, 2009）。その結果、(1) 人は自らが身を置く集合体における他者との関係性に応じて異なった心理・行動傾向を生起させること；(2) 異なる関係性のもとでは同じ日本人、アメリカ人であっても異なる心理・行動傾向を生起させることが明らかとなってきた。

アメリカ社会や日本社会の「文化」を、そこに身を置く人々が織りなす「関係性の束（集積）」として捉え直し、旧来の二分法の限界を超えるために、この視点に立つ研究のさらなる蓄積が必要と考えられる。

２．研究の目的

本研究は、これまでの一連の研究の流れを踏まえ、集合体における人々の関係性の違いが当該の集合体に身を置く個々人の心理・行動傾向、とりわけ自己評価維持の方略にいかなる違いをもたらすかを体系的に理解することを目的として行われた。

(1) 他者との心理的関係性に関わる次元の抽出

我々はこれまでの研究において、他者との心理的関係性を測定するための 24 項目からなる尺度を開発し、日本人大学生を対象として第一段階のデータ収集を行った（e.g., Muramoto, 2004）。多次元尺度法を用いた分析によって得られた知見は、心理的関係性に（単なる親密度の違いでは説明しきれない）複数の構成要素があることを示唆していた。本研究では、Muramoto（2004）の尺度を基に、日本・アメリカの双方で測定可能な新たな関係性尺度を整備して、心理的関係性に関する通文化的な構成要素を見出すことを目指した。さらに、抽出された種々の構成要素の組み合わせによって関係性のプロトタイプを同定し、親密度の異なるさまざまな他者（父・母・きょうだい・親友・知人・初対面の他者）との関係性の質的な差異を区別、分類することを試みた。

(2) 関係性の次元と自尊心維持・高揚方略との関連の検討

自己評価維持の心的過程を個人内に閉じたプロセスとしてでなく、他者との関係性の中に組み込まれたインタラクティブなプロセスとして捉える視点に立ち、達成原因帰属の文脈で実証的検討を行った。具体的には、個人が成功や失敗を経験した際に、他者からのポジティブな評価を期待することを通じて間接的に自尊心を維持・高揚する「間接的自己高揚」過程（Muramoto, 2003）に着目し、こうしたプロセスがどのような関係性のもとで生起するか、他者への期待を可能にする関係性の構成要素は何かといった点を明らかにすることを目的とした。

(3) 関係性のミニマル・モデルの構築と、それに応じた拡張自己評価維持メカニズムの検討

これまでに行ってきた研究から見出された典型的な関係性のミニマル・モデルを実験室内に再現し、各々の状況下におかれた個人が他者とのインタラクションを通じて果たす拡張自己評価維持プロセス（Beach & Tesser, 1995）について、精緻に検討することを目的とした。ここでも達成原因帰属における自己高揚／自己卑下傾向に焦点を当てた。具体的には、心理的一体感に根ざした関係性（他者の自尊心に配慮する必要性が低い）と、互恵性に根ざした関係性（他者の自尊心に配慮する必要性が高い）を実験的に設定した。それぞれの状況に置かれた個人に対して成功または失敗を経験させるための実験操作を施し、当該の個人が関係性に応じて異なる自己評価維持・高揚の方略（他者とは独立に直接的な自己高揚を図る方略と、自己と他者とがお互いの自尊心を守りあうことによって間接的に自己高揚を図る方略）を用いるという仮説を検証した。

(4) 現実場面での検証

本研究が検討してきた関係性モデルの妥当性を現実場面の文脈で検討するため、企業・団体の正社員を対象としたインターネット調査を実施し、上司・同僚との関係性の様相と、職務に関わる自己評価や組織行動との関連を検討した。

(5) その他

本研究テーマに関連する 2 つの共同研究（離島漁村をフィールドとした疑似家族に関する研究プロジェクト、集団規範の生成と維持に関する研究プロジェクト）も並行して

進めた。

３．研究の方法

(1) 他者との心理的関係性に関わる次元の抽出

Muramoto（2004）が用いた 24 項目の関係性尺度を基に、アメリカスタンフォード大学の Markus 教授、大学院生の Fu 氏と協議するとともにプリテストを重ねて、33 項目の改訂版尺度を整備した。併せて、Muramoto（2003）で用いた他者との主観的な相互理解度に関する設問も併用した。これらの質問項目を用いて、回答者の周囲にいる代表的な他者（父母・親しい友人・同僚・初対面の他者）との関係を、日米の大学生（アメリカ人 72 名・日本人 63 名）に評定してもらった。個人内相関行列データに基づいて多次元尺度法を施し、心理的関係性の質に関する通文化的な構成要素の抽出を試みた。

(2) 関係性の次元と自尊心維持・高揚方略との関連

質問紙実験による検討を行った（対象者：日本人大学生 118 名）。質問紙は Muramoto（2003）の知見をベースとして、これまでの人生において重要だったと考える成功・失敗経験について想起させた。続いて、さまざまな内的・外的要因が当該の成功・失敗の原因としてどの程度重要と考えるかを尋ねた。さらに、このことについて回答者にとって関係性の異なる他者（母・親友・初対面の人）がそれぞれどのように考えるかを推測させた。最後に、関係性尺度を用いてそれぞれの他者と自己との関係性のありようについて尋ねた。

主な仮説は以下のとおり。①参加者は自らは自己卑下的な原因帰属を行う一方で、周囲の重要他者（母・親友）が自らの成功を内的要因に帰属することを推測するだろう。②他者からの好意的な帰属を期待する程度は、当該他者との心理的な関係性の様相に応じて種々の影響を受けるだろう。

(3) 関係性のミニマル・モデルの構築と、それに応じた拡張自己評価維持メカニズムの検討

実験室実験による検討を行った（対象者：日本人大学生 85 名）。Common Fate 状況（他者と自己とが同じ成功または失敗を共有しており、他者の自尊心への配慮の必要性が低い関係）と、Win-Lose 状況（自己が成功すれば他者が失敗する状況であり、他者の自尊心への配慮の必要性が高い関係）を実験室内に作り出し、状況の違いが個人の自己評価維持方略に与える影響について検証した。独立変数は① 個人の遂行の結果（成功／失敗）、② 状況（Common Fate／Win-Lose）、③ 関係の近さ（近接／疎遠）の 3 要因、従属変数は成功または失敗の結果に対する原因帰属とした。

参加者は 2 名一組で実験室に入室した。近接条件では自己紹介やいくつかのアクティビティを通じて 2 名に相互作用の機会が与えられたが、疎遠条件では 2 名の間についたてがあり、一切の相互作用が禁じられた。続いて参加者は、社会的感受性という仮想的な能力を測定するテスト課題を独りで行った（テストに先立ってこの能力の重要性を説明し、参加者の動機づけを高めた）。

テスト終了後、半数の参加者には非常によい成績（成功条件）、半数には非常に悪い成績（失敗条件）がフィードバックされた。さらにこのとき半数の参加者は、同室の他者が自分と同様の成績をとったこと（Common Fate 条件：両者とも成功または失敗）、もう半数の参加者は、他者と自分が正反対の成績をとったこと（Win-Lose 条件：一方が成功なら他方は失敗）を知らされた。その後、参加者は個々に自分の成績に関する原因帰属などの尺度に回答した（参加者の回答内容が他者に知らされることはない旨、あらかじめ強調されていた）。

主な仮説は以下のとおり。回答内容が他者に知らされることがないとわかっていても、①Win-Lose 条件の参加者はより自己卑下的、Common Fate 条件の参加者はより自己高揚的な原因帰属を行う傾向があるだろう。②近接条件の参加者はより自己卑下的、疎遠条件の参加者はより自己高揚的な原因帰属を行う傾向があるだろう。

また、同様のパラダイムでシナリオを用いた質問紙実験も実施した。

(4) 現実場面での検証

ウェブリサーチ会社（クロスマーケティング社）を通じてインターネット調査を実施した。対象者は 500-600 名程度の正社員や団体職員（いずれも同社のネット調査モニター）とした。調査票では、職場における人的流動性、多元的なリーダー-フォロワーシップ構造、および上司・部下や同僚間の心理的関係性、規範共有のありようを多面的に測定し、それらの違いが従業員の職務態度や行動、自己評価等にいかなる異なった影響を及ぼすかを検証した。

(5) その他

本研究に関連する共同研究（離島漁村をフィールドとした疑似家族に関する研究プロジェクト、集団規範の生成と維持に関する研究プロジェクト）において、各々データ収集と論文執筆に従事した。

４．研究成果

(1) 他者との心理的関係性に関わる次元の抽出

関係性尺度 33 項目の個人内相関行列データに基づいて多次元尺度法による解析を行

い、図 1 のような 2 次元解を得た。X 軸は Psychological Distance （Close-Distant）、他方、Y 軸は Construal of Relationship（Independent-Interdependent）として意味づけられた。

近接する項目群から表 1 のような 7 つのクラスターを関係性の構成要素として抽出した。結果の構造はアメリカデータと日本データを別々に分析した場合にも一貫して見出され、文化を超えた共通性が確認された。

クラスターごとの回答平均値を算出し、関係性クラスタースコアとした。これらを従属変数として 2 元配置分散分析（文化×ターゲット人物）を施した。全体として日米の回答パターンは類似していたが、一方で文化とターゲットの有意な交互作用効果も確認された。たとえば、アメリカ人回答者は父母や親友といった重要他者に対する Humility（謙遜）得点が高かったが、日本人回答者の場合、父母に対する Humility 得点が他のターゲット人物に比して有意に低いという傾向があった。アメリカ人回答者の場合、ターゲットに対する Humility 得点の高さは、当該他者から理解されていると感じる程度（0-100%）と正の相関を示していた（例：親友 p=.274 *）が、日本データの場合にはそうではなかった（同 p=.075 *n.s.*）。日本人回答者に限って、Unity（心理的一体感）得点の高いターゲットに対しては謙虚さを示さないという結果が得られた。

総じて、日本のサンプルにおいては親密な他者との関係性には心理的一体化を基盤とする関係（典型的には家族との関係）と互恵性を基盤とする関係（典型的には友人との関係）の 2 タイプがあり、いずれも心理的距離は近いものの内実は一様ではなかったのに対し、アメリカのサンプルにおいてはそのような質的な区別はなく、いずれの関係性の側面においても心理的距離が近いほど得点が高く、遠いほど得点が低いというシンプルなリニアの関係が確認できた。

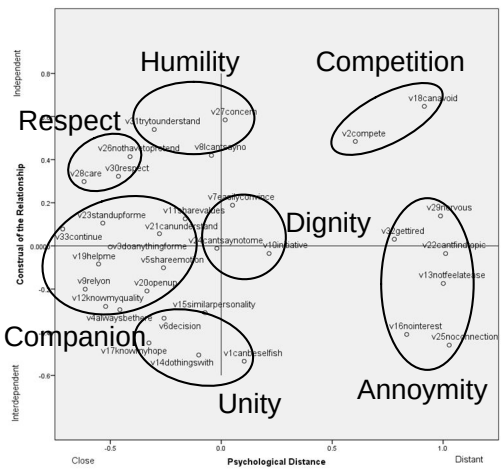

図 1. MDS に基づく関係性クラスターのプロット

表 1. 通文化的な関係性のクラスター

Label	Explanation
Respect	Components of the relationship based on mutual liking and emotional attachment
Companion	
Unity	
Dignity	Components of mutual face-saving in the society, in which people need to defend own face and others' face simultaneously (Goffman, 1967)
Humility	
Competition	Components of the anomic relationship, which is typically observed among strangers
Annoymity	

⑵ 関係性の次元と自尊心維持・高揚方略との関連

仮説①のとおり、参加者は自らは自己卑下的な原因帰属を行う一方で、周囲の重要他者（母・親友）が自らの成功を内的要因（能力・努力）に帰属することを推測する傾向が見られた。この知見は、先行研究（e.g., Muramoto, 2003）とも合致するものだった。

仮説②のとおり、他者からの好意的な帰属を期待する程度は、当該他者との心理的な関係性の様相に応じて種々の影響を受けていた。前述のとおり、参加者の多くは母と親友を重要他者と考えており、これらの他者が自分の成功を内的要因（能力）に帰属することを期待していたが、その期待の規定因となる関係性の構成要素には、両者の間で違いもみられた。具体的には、母が自分の成功や失敗に対して行う原因帰属の推測は、Unity（心理的一体感）次元の影響のみを受けており、母との心理的一体感を強く感じている参加者ほど、母が自らの成功を内的要因（能力など）に帰属するとより強く推測していた。他方、親友の場合には、Unity 次元に加えて、他にもさまざまな次元の影響が見出された。すなわち、親友との関係性に相互配慮（Dignity & Respect）的な要素が強いと考えている参加者ほど、親友が自らの成功を内的要因（能力など）に帰属すると推測していた。また、親友との関係性に Humility（謙遜）の要素が強いと考えている参加者ほど、親友が自らの失敗を外的要因（運など）に帰属することを期待しない傾向があった。

母に代表される家族との関係性は、心理的一体感の高い「身内」関係の典型と考えられる一方で、親友との関係性はより複雑で、心理的一体感とともに、互いの自尊心を支え合う相互配慮、すなわち互恵的関係の要素も大きい。このように質的に異なる関係性のもとで、人は異なった自尊心維持・高揚の方略をいわば自動的に発現させている可能性があると思われる。

(3) 関係性のミニマル・モデルの構築と、それに応じた拡張自己評価維持メカニズムの検討

仮説①のとおり、Win-Lose 条件（互恵的関係性を生起させる状況）の参加者はより自己卑下的、Common Fate 条件（心理的一体感を生起させる状況）の参加者はより自己高揚的な原因帰属を行う傾向が、複数の内的・外的要因に関して確認された。具体的には、Win-Lose 条件の参加者は、自らが成功したときよりも失敗したときに、その原因を能力や素質といった内的要因に帰属しやすく、また、自らが失敗したときよりも成功したときに、運や課題の易しさといった外的要因への帰属を行いやすかった。Common Fate 条件の参加者にはこういった帰属バイアスは見出されなかった（図 2）。

また、仮説②のとおり、近接条件の参加者はより自己卑下的、疎遠条件の参加者はより自己高揚的な原因帰属を行う傾向が、複数の外的要因（課題、体調、他者の存在）に関して確認された（図 3）。

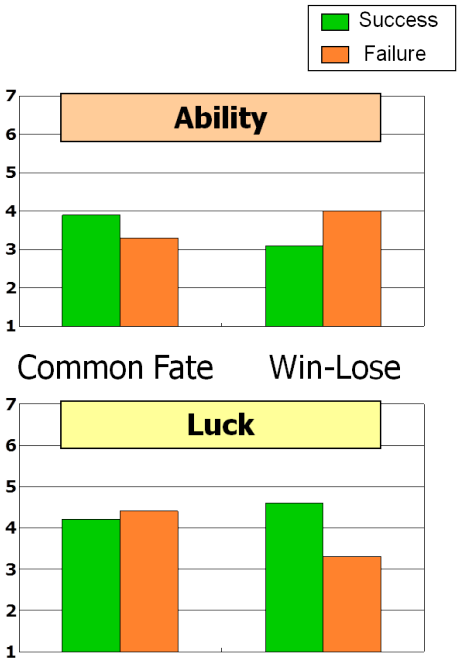

図 2. 状況に応じた原因帰属パターン
（縦軸は当該要因に原因を帰属する程度）

図 3. 関係の近さに応じた原因帰属パターン
（縦軸は当該要因に原因を帰属する程度）

上記のとおり、参加者は、自らのパフォーマンスが他者の自己評価を脅かすおそれがある場合に、控え目な原因帰属を行う傾向があった。この傾向は、たとえ自らが行う原因帰属が当該の他者に知られることがないとわかっていても見出された。その意味で、こうした原因帰属の傾向は、単なる自己呈示ではなく、関係性に応じて立ち現れる自尊心維持方略として理解することが妥当だと考えられる。

(4) 現実場面での検証

職場における直属の上司（フォーマル・リーダー）との関係性と、信頼に足る同僚（インフォーマル・リーダー）との関係性を区別して測定するとともに、各々に対するリーダーシップの認知と回答者自身の勤務意欲や組織行動との関連を検討した。総じて、フォーマル・リーダーに対してはメンテナンス（集団維持能力）面でのリーダーシップ評価が高い場合、インフォーマル・リーダーに対してはパフォーマンス（目標達成能力）面での評価が高い場合に、職務満足や勤務意欲が高まる傾向がみられた。こうしたリーダーシップ認知と各々のリーダーとの関係性の様相との関連については、なお分析中である。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

①正木郁太郎・村本由紀子. 組織コミットメントが組織学習に及ぼす影響について. 社会心理学研究第 31 巻 1 号（印刷中）.
②村本由紀子・遠藤由美. 答志島寝屋慣行の維持と変容: 社会生態学的視点に基づくエスノグラフィー. 社会心理学研究第 30 巻 3 号, 2015 年, 213-233 頁.
③村本由紀子. 離島漁村「寝屋慣行」の維持と変容: 社会心理学からのアプローチ. 文化交流研究第 26 巻 1 号, 2013 年, 1-10 頁.

〔学会発表〕（計　5 件）

①Yukiko Muramoto. Perceived consensus or personal beliefs?: Effects of group norms on employees' behavior and attitude toward work. Presented at the 28th International Congress of Applied Psychology, Paris, France, July 8-13 2014.
②村本由紀子. 他者のこころの認知と集団規範の生成: 「暗黙のルール」はいかにして生まれるか. 日本認知心理学会公開シンポジウム「認知心理学のフロンティア: こころの常識と偏見を越えて」, Oct 18 2014. [Invited]
③Yukiko Muramoto & Yumi Endo. A socio ecological approach to a quasi-family relationship in a remote island in Japan.

Presented at the 10th Conference of Asian Association of Social Psychology, Yogyakarta, Indonesia, Aug 2013.
④村本由紀子. 「規範」研究の方法論としてのマイクロ・エスノグラフィーの可能性. 日本社会心理学会第 54 回大会（沖縄国際大学）ワークショップ, Nov 2 2013.
⑤村本由紀子. リターン・ポテンシャルモデル再考. 日本社会心理学会第 53 回大会(つくば国際会議場）ワークショップ. 2012.11.17

〔図書〕（計　3 件）

①村本由紀子. 「自己と他者」という問題をめぐって. 熊野純彦・佐藤健二 編 『人文知 3: 境界と交流』. 東京大学出版会, 2014 年.
②村本由紀子. 文化. 唐沢かおり 編 『新社会心理学: 心と社会をつなぐ知の統合』. 北大路書房. 2014 年, 131-148 頁.
③村本由紀子・辻本昌弘. 文化的存在としての人間. 唐沢穣・村本由紀子 編 『個人と社会のダイナミクス：展望 現代の社会心理学 III』. 誠信書房. 2011 年, 266-285 頁.

〔その他〕シンポジウム・ワークショップ企画（計　3 件）

①木下冨雄・山口裕幸・村本由紀子. 規範研究、最開拓: 「多元的無知」を切り口に. 日本社会心理学会第 55 回大会・自主企画ワークショップ(北海道大学), July 27 2014.
②木下冨雄・山口裕幸・村本由紀子. 規範の測定と可視化への再挑戦 2: 「個人の認知を超える」試み. 日本社会心理学会第 54 回大会・自主企画ワークショップ(沖縄国際大学), Nov 2 2013.
③木下冨雄・山口裕幸・村本由紀子. 規範の測定と可視化への再挑戦. 日本社会心理学会第 53 回大会・自主企画ワークショップ(つくば国際会議場), Nov 17 2012.

６．研究組織

(1)研究代表者
村本由紀子（MURAMOTO YUKIKO）
東京大学・人文社会系研究科・准教授
研究者番号：00303793